

2022年12月4日アドベント礼拝

『さあ、ベツレヘム』

ルカ2:15~20

## 聖書箇所

15 御使いたちが彼らから離れて天に帰ったとき、羊飼いたちは話し合った。「さあ、ベツレヘムまで行って、主が私たちに知らせてくださったこの出来事を見届けて来よう。」

16 そして急いで行って、マリアとヨセフと、飼葉桶に寝ているみどりごを捜し当てた。

17 それを目にして羊飼いたちは、この幼子について自分たちに告げられたことを知らせた。

18 聞いた人たちはみな、羊飼いたちが話したことに驚いた。

19 しかしマリアは、これらのことをすべて心に納めて、思いを巡らしていた。

20 羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて御使いの話のとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。

## 導入:救い主は来られた。

最近3年ぶりという言葉をよく聞くとは思いませんか?コロナ禍になってから3年、その間できなかったことが最近ようやくできるようになってきて、3年ぶりという言葉を使う機会が増えたように感じます。例えば11月にあった土浦花火大会ですね。3年ぶりの開催とあって、全国からたくさんの方が集まり、例年以上の盛り上がりを見せました。教会の中でのイベントも3年ぶりに開催されたもの、されているもの多くあります。TEENSでは毎年釜メシという一泊のお泊まり会をしているのですが、コロナ禍の中では、お泊まりを自粛していました。しかし、先日行われた釜メシは3年ぶりに1泊することができたのです。1泊することでじっくりと神様を賛美し、みことばを聞き、仲間と共に楽しい時間を過ごすことができました。楽しそうな子どもたちの様子を見て、私も年甲斐もなくはしゃいでしまいました。

3年ぶり。この言葉には時間をあらかわす以上の喜びが含まれているように感じます。コロナ禍という長い暗闇の恐れや不安が、緩和されているように感じるからでしょうか。まだまだ気を抜くことはできませんが、それでも私たちが願っていた日常は徐々に近づいているという実感と期待を持つことができます。不安や恐れが完全に取り除かれるその時を期待しながら、その時が訪れたらあれをしたい、これをしたいという思いを持っている方も多いことでしょう。

今日はアドベント第2週の主日です。私たちはクリスマスの主イエス・キリストを待ち望みつつ、この期間を過ごしています。今日のみことばは最初のクリスマスでの出来事です。今私たちが迎えているアドベントの期間は約1ヶ月ですが、最初のクリスマスを待ち望むアドベントは約400年でした。

旧約聖書の時代、神様のみことばは直接人に語られたり、預言者を通して与えられていました。しかし、旧約聖書で、この世界に救い主が来られるという最後の預言があつてからは、神様からのみことばは途絶えていました。この期間を中間時代というのですが、救い主の預言が語られた人たちは神様のみことばがない中でも待ちました。それは明日なのか、明後日なのか。今年なのか、来年なのか。しかし、彼らに救い主が与えられたのは、実にそれから400年もの時が過ぎてからだったのです。イエス様が与えられたのは400年ぶりのごとだったのです。400年ぶりの嬉しい知らせ。その知らせを受けた人はどうしたのでしょうか。そして、今私たちにも届いているクリスマスの祝福。その嬉しい知らせを聞いた私たちはどうするのでしょうか？みことばから一緒に考えてみましょう。

## 本文Ⅰ：救い主が与えられた

まずは、理解を深めるために、最初のアドベントについて見てみましょう。先ほどの、中間時代の400年というのはイスラエルの民にとって、決して平安なものではありませんでした。この400年の間イスラエルの地はペルシア、アレキサンドリヤ、ギリシャ、シリア、そして、ローマによって支配され続けました。400年もの間、自分たちの故郷が他の国に支配されていたのです。救い主が来られるとの預言が成就される可能性なんて考えられないほどに苦難が続いていました。救いの希望はあるのに、なかなか成就されない。救いの希望があるのに苦しいことが続いていて終わりすら見えない。明日は救われるだろうか。来年は救われるだろうか。そのような思いの中で400年は過ぎて行きました。**ルカ2:8~14**

**8 さて、その地方で、羊飼いたちが野宿をしながら、羊の群れの夜番をしていた。**

**9 すると、主の使いが彼らのところに来て、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。**

**10 御使いは彼らに言った。「恐れることはありません。見なさい。私は、この民全体に与えられる、大きな喜びを告げ知らせます。**

**11 今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。**

**12 あなたがたは、布にくるまって飼葉桶に寝ているみどりごを見つけます。それが、あなたがたのためのしるしです。」**

**13 すると突然、その御使いと一緒におびたしい数の天の軍勢が現れて、神を賛美した。**

**14 「いと高き所で、栄光が神にあるように。**

**地の上で、平和が**

**みこころにかなう人々にあるように。」**

やがて救い主誕生の知らせは羊飼いたちに与えられます。少し羊飼いについても考えてみましょう。羊飼いとはその名の通り、羊の世話をする人たちのことです。皆さんは羊飼いと聞くとどのようなイメージを持っているのでしょうか。どこか牧歌的でどこかでゆったりとしているという風に思うのでしょうか。ですが、実は羊飼いというのはとても大変な職業なのです。一年中休む間もなく羊のために働かなくてはなりません。春は羊たちの出産の季節です。生まれたばかりの子羊はとても弱いので死んでしまわないように細心の注意を払わなければなりません。夏には羊たちをたくさん食べさせるために緑の牧場を探して歩き回ります。重労働である羊の毛

刈りも夏に行なわれます。秋には冬に備え、少しでも気温の高い低地へと羊を大移動させます。また、冬の餌である枯れ草の準備もします。冬には餌も少なく、天候が厳しくなるので、羊たちが死なないように常に気を配っていきなくてはなりません。もちろん一年、羊たちが中病気や怪我にならないように注意し、野生の獣に襲われないように気を付けている必要があります。一年中働き通して気が抜けない職業、それが羊飼いなのです。

さらに、2000年前の羊飼いたちは卑しい者として扱われていました。いくら頑張っても身分が上がることもない、社会の最下層の身分だったのです。おそらく、彼らは国の状況を、そして、今の自分たちの置かれている立場を思い、嘆いていた事でしょう。

そんな彼らに与えられたのがこの喜びの知らせです。長い間待ち望んでいた救い主がついに生まれたその大事件は羊飼いたちに知らされました。今嘆いているあなたがたのために、あなたがたのために救い主がお生まれになった。嘆きが自然とこぼれ出る私のために、メシヤが生まれた。この喜びの知らせは心の嘆きを喜びに変えてくれるのです。**ルカ2:15~20**

**15 御使いたちが彼らから離れて天に帰ったとき、羊飼いたちは話し合った。「さあ、ベツレヘムまで行って、主が私たちに知らせてくださったこの出来事を見届けて来よう。」**

**16 そして急いで行って、マリアとヨセフと、飼葉桶に寝ているみどりごを捜し当てた。**

**17 それを目にして羊飼いたちは、この幼子について自分たちに告げられたことを知らせた。**

**18 聞いた人たちはみな、羊飼いたちが話したことに驚いた。**

**19 しかしマリアは、これらのことをすべて心に納めて、思いを巡らしていた。**

**20 羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて御使いの話のとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。**

羊飼いたちは喜びの知らせを聞くと、立ち上がり、ベツレヘムに向かいました。さあ、ベツレヘムに行って、主が私たちに知らせてくださった、喜びの事実を確認しよう！彼らは野宿の最中でした。羊たちを守っている最中でした。おそらくこの日も必死に働いてくれたことなのでしょう。眠くて仕方なかったのかもしれませんが。救い主が生まれたからといって、今日の仕事がなくなるわけでもありません。しかし、それでも、彼らは、“さあ、ベツレヘム”と、救い主に会いに行きました。不安、恐れ、不満、疲れ、乾き、忙しさなど、すべての言い訳を置いて、何よりも救い主に会いに行ったのです。彼らは 400 年ぶりの神様のみことばを喜んだのです。さあ、ベツレヘム！この言葉は、神様のみことばを心から喜ぶ者の口から出てきます。その喜びは心に溢れることでしょう。他の誰のためでなく、私のために生まれたみどり子。私のためにしるし。そのしるしが私を満たし、喜びが溢れるのです。

## 本文2:救いの喜び

では、救い主とは何でしょう？なぜ 2000 年前も、今も、キリストの誕生を喜ぶことができるのでしょうか。その

喜びの理由は私たちの救いにあります。**イザヤ42:1~4**

- 1 「見よ。わたしが支えるわたしのしもべ、  
わたしの心が喜ぶ、わたしの選んだ者。  
わたしは彼の上にわたしの霊を授け、  
彼は国々にさばきを行う。
- 2 彼は叫ばず、言い争わず、  
通りでその声を聞かせない。
- 3 傷んだ葦を折ることもなく、  
くすぶる灯芯を消すこともなく、  
真実をもってさばきを執り行う。
- 4 衰えず、くじけることなく、  
ついには地にさばきを確立する。  
島々もそのおしえを待ち望む。」

イエス様の救いが私たちに与えられている理由はなんなのでしょうか。なぜ私たちは救われたのでしょうか。なぜイエス・キリストはクリスマスに来られたのでしょうか。それは、イエス様は弱い私たちをも愛してやまない方だからです。イエス様はいたんだ葦を折ることがありません。くすぶる灯芯を消すこともありません。葦はもともと茎の中身が空洞の植物です。それがさらにいたんでいると、少しの刺激でも折れてしまいます。くすぶる灯芯は少しの風でも消えてしまうでしょう。そのように弱い存在でもイエス様はありのまま受け入れてくれるのです。イエス様は、決して失敗せず、諦めない方です。この世に「神様が示す、正しく進むべき道」を打ち立てることを諦めません。これは私たちを救おうとするイエス様の熱心です。イエス様は闇の中にいる者の手を決して離されないのです。

福音書にはイエス様の生涯が記録されています。医者から見放された病人も、嫌われ者の取税人も、重い罪を犯した罪人であっても。そのすべてを救われました。それは、今の私たちも同じです。どんな人であってもイエス様に救いを求めるなら、イエス様は熱心を持って、その求めに必ず応えてくれます。私たちのそのままの姿を受け入れてくださるイエス様は、私たちの弱さも知っておられる方です。いたんだ葦を折ることのないイエス様は、私たちをそのまま受け入れて下さる方です。そしてイエス様の熱心は変わることがありません。

病気に罹ったことのある人は回復した時に安心や喜びを感じることができるようでしょう。痛みを覚えている人から、痛みが除かれると助かったと思うことでしょう。罪に関しても同じです。罪は私たちを苦しめます。罪の中にいることはとても苦しいのです。だから、罪からの救いには喜びが伴います。私を苦しめているこの罪を取り除く方が、救い主なのです。彼は衰えず、くじけない。ついには、成し遂げる。とあります。神様は私を作り直す業を諦めない、と言います。救い主は、必ず地に広義を打ち立てる、と言われます。これはイエス・キリストが人を罪から必ず救われるということを意味しているのです。だから救い主は私たちにとって喜びとなるのです。

## 結論:さあ、ベツレヘム

アドベントを過ごす私たち、クリスマスを持ち望む私たち、そんな私たちに救い主イエス様が与えられました。その喜びの知らせが届きました。では、私たちはどうしますか?待ち望んでいた救いが私たちに与えられている今、私たちはどうするのでしょうか。知らせを受けた私たちは何をするのでしょうか。

## 20 羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて御使いの話のとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。

羊飼いたちはさあ、ベツレヘムと、イエス様に会いに行きました。その彼らに与えられたのは、みことばへの確信と溢れるばかりの賛美です。救いの知らせが届いた時、彼らはみことばを信じ、行動しました。そして、溢れるばかりの感謝を捧げる者となりました。さあ、ベツレヘム。主イエス・キリストの御前に出て行った彼らは、不安を見る者ではなく、主を見上げ、喜びと賛美の溢れる者へと変えられたのです。

さあ、ベツレヘム。アドベントを過ごす私たちは、この言葉を口にしたいと願います。救い主を見上ることを願いたいのです。

不安があるでしょうか。悲しみがあるのでしょうか。何をしても変わらないという思いからくる虚しさがあるでしょうか。自分の弱さに挫けてしまいそうになるでしょうか。さまざまな恐れがあるでしょうか。理解されないという寂しさがあるでしょうか。満たされない渴きがあるでしょうか。癒されない痛みがあるでしょうか。自分の罪を覚え苦しさに溺れそうになっているでしょうか。

私たちに救い主が与えられていることを覚えましょう。さあ、ベツレヘムと主の前に出ていきましょう。そこには必ず賛美があります。そこにおられる主は、必ず私たちを受け止めてくださいます。主の前で私たちは賛美を口ずさむ者へと変えられることを確信しましょう。

クリスマスを待ち望む私たちが、主の前に出ていく者となることを願い、祈ります。